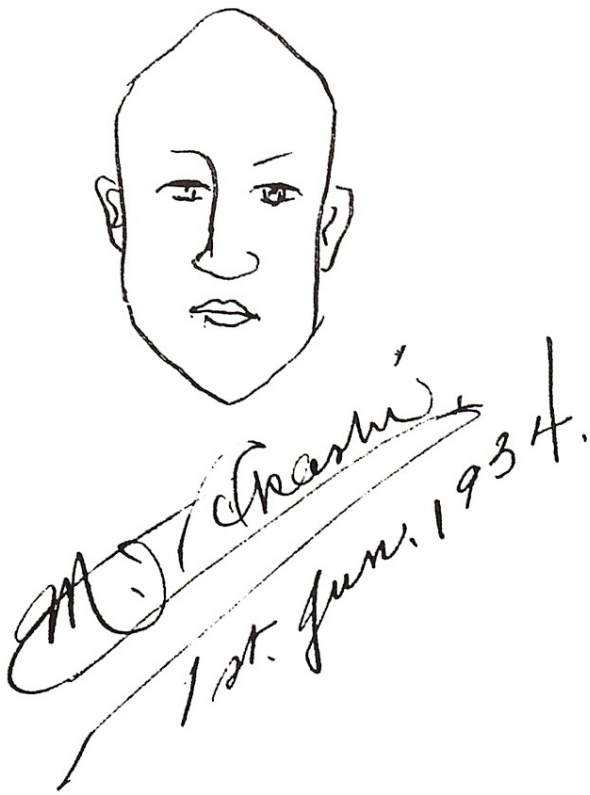


# 新 歌人群像

# 明石海人

「天刑」から「天啓」へ

前川佐重郎



## 海人素描

明石海人あかしうみひとは昭和の短歌の大きな「光り」であり、同時に大きな不幸を背負っていた。しかし、その「光り」は現在さらにその光輝を増しつづけている。

明石海人は一九〇一（明治三十四）年七月五日、静岡県片浜村（現・沼津市）の旧家の三男として生まれた。明石海人はペンネームで、本名は野田勝太郎である。

地元の沼津商業学校、静岡師範学校を卒業後、一九二〇（大正九）年、画家を志して上京し、会社員として働きながら絵画を学ぶ。結婚して二女を得たが、一九二七（昭和二）年頃ハンセン病と診断され、明石市（兵庫県）など各地を転々としながら療養生活を送り、やがて岡山県の瀬戸内海沿いにある長島愛生園に入院した。この愛生園で生涯を閉じた。一九三九（昭和十四）年六月五日、三十八歳であった。

しかし、入院中、小康を得ては短歌のほか俳句、自由詩、散文詩など絵画のみならず多彩な文学的才能を発揮しはじめる。

短歌については療養所内の雑誌「愛生」や「長島短歌」に発表した。やがて前川佐美雄

の短歌に強い感化をうけ、その指導を受けるようになる。

そのゆたかな才能はたちまち佐美雄の主宰する「日本歌人」誌上で注目されるようになる。そして一九三八年には改造社版の『新万葉集』に十一首が収録され、一躍歌人として広く注目されることとなった。ハンセン病を詠んだその境涯詠、闘病詠のすぐれた文学性に高い評価を受けたからであった。

しかし、その時すでに病は進行し、失明に加えて気管を切開するなど海人の闘病は一段と深刻なものとなっていた。

そのような中で、一九三九年二月、改造社より歌集『白描』を上梓し、歌界のみならず各方面より絶讃された。しかし、その年の六月に死去する。明石海人の遺骨が郷里の静岡県に向かう途中、前川佐美雄は大阪駅で遺骨と対面し、その大きな才能の喪失を悼んだ。

## 『白描』の世界

海人の死の間際に出た歌集『白描』の前身に、有名な次のような言葉がある。

「癩は天刑である。(筆者注、かつてハンセン病は癩病と呼ばれ、一九九六年らい予防法が廃止され、患者への不当な国の対応が中止

されたが、それまでは根強い偏見と差別がつづいた) 加はる筈の一つ一つに、嗚咽し慟哭しあるひは呻吟しながら、私は苦患の闇をかき捜つて一縷の光を渴き求めた。(中略) 人の世を脱れて人の世を知り、骨肉を離れて愛を信じ、明を失つては内にひらく青山白雲をも見た。癩はまた天啓でもあつた。」

このような病の言わば煉獄のなかから短歌という光明を見出し出した心の軌跡が簡潔に述べられている。

そむけたる医師の眼をにくみつうべ  
なひ難きこころ昂ぶる

看護婦のなぐさめ言も聞きあへぬ忿も  
似るこの佗しさを

在るまじき命を愛しくうちまもる噴水  
の水は照り崩れつつ

『白描』の冒頭「診断」の中に収められている。詞書に「病名を癩と聞きつつ暫しは己が上とも覚えぬ」とある。当時のハンセン病に対する差別と偏見を考えれば、海人が受けた衝撃と落胆、そして忿りと悲しみがこれを読む者にじかに伝わってくる。

一首目は医師に病名を告げられ、そのことが信じ難く、またそれをやすやすと頷く気持

ちには到底なれない。むしろ、病名を告げた医師の眼をにくしく見つめながら心が昂ぶってきたのである。

二首目は、茫然自失の身には看護婦のなぐさめの言葉も耳に入らない。ぶつつけようのない忿りのなかに佗しさがこみあげてきたのである。衝撃の大きさとその感情表出が短歌という詩型の中に十分に詠みこまれている。

三首目は、病名を告げられた後、東京上野の山をさまよい歩いた。自らの生命を想いつつ噴水の噴き上げる様子を眺めた。そして慟哭する。

駅のまへえのきの梢にこの暁をこごだ  
く群れて鴉はさわぐ

沼津商業学校卒業写真(一九一八年)



# 明石海人

新 歌 人 群 像



長女のみづほを抱く妻・浅子と（一九二五年）。この後ほどなくしてハンセン病の診断を受ける。

幾たびを術なき使りはものすらむ今日  
を別れの妻が手とるも

鉄橋へかかる車室のとどろきに憚から  
ず呼ぶ妻子がその名は

同、「家を棄てて」十首の中に収められて  
いる。差別と偏見のなかで、いつまでも妻子  
のもとに留まっていたるわけにはゆかなかつた。  
家を去り妻子とも離別せざるをえなかつた。  
その悲痛な心境が詠みつがれている。

一首目は、まだ明けきらない暁に家を出て  
駅についた。その駅前にあった榎に鴉が群れ  
さわいでいたのである。突然の不幸を背負つ  
た中で、さらに不安をかきたてるような光景  
と心情が余すなく詠みこまれている。

二首目は、愛する妻の手をとりながら別れ  
を告げる。これからは妻への使りもままなら  
ない。別れの悲しみが切々と伝わってくる。

三首目は、故郷や妻子とも離別し、汽車に  
乗って療養への旅に出た。心をきめて家を棄  
てたとはいえ、妻子への抗い難い気持ちを抑  
えることができない。作者の心情が読む者の  
心を揺さぶる。

## 境涯と闘病

父母のえらび給ひし名をすててこの島  
の院に棲むべくは来ぬ

注射針の秀尖のあたりふくれゆく己が  
膚をまじまじと見る

おのづから遁るるごときおもひもて重  
病室の廊を帰り来

亡骸をおくり来りて月あかき解剖室に  
讚美歌をうたふ

面会の兄と語らふ朝なぎを青葙むらに  
波のたゆたふ

息つめてぢやんけんぼんを争ひき何か  
は知らぬ爪もなき手と

死にかはり生れかはりて見し夢の幾夜  
を風の吹きやまさりし

鼻ありて鼻より呼吸のかよふこそこよ  
なき幸の一つなるらし

まともなる息はかよはぬ明暮を命は悲  
し死にたくもなし

おほかたは命のはての歌ぶみの稿を了  
へたり霜月の朔

海人の境涯、闘病の作品を集の順にしたが  
って任意に引いたものである。その悲痛な境  
涯と病のなかで、それぞれの作品が一行の詩  
として屹立している。その一首一首に歌とし  
て海人の姿が見えてくる。それは病を嘆き、  
憎み、暗がりに遁れようとすただけのもの  
ではない。やがてその境涯を受けいれ、そこか  
ら自らの歌に精魂をかたむけたのである。そ  
こに海人の自立した文学としての短歌が読む  
者をうつのである。

## 「翳」の歌について

明石海人の短歌は歌集「白描」には第一部  
「白描」と第二部「翳」が収められているが、  
この「翳」の冒頭に次のような詞書がある。



長島愛生園目白舎に海人（右端）を励ましに訪れた吉川則比古ら「日本詩壇」同人たちと（1936年）（皓星社版『海人全集』より）

「単なる空想の飛躍でなく、まして感傷の横流でなく、刹那をむすぶ永遠、仮象をつらぬく真実を覚めて、直観によつて現実を透視し、主観によつて再構成し、（中略）一首一首の作歌過程に於て、より深く己が本然の相に触れ得たことに、私はひそかな喜びを感じてゐる。」と記している。

これは何を意味しているのだろうか。病が進行するなかで、前川佐美雄の「日本歌人」に入会、同人となり、シュールレアリス

スムなどの影響を受けたモダニズム短歌の手法や想念に接し、それまでねむっていた「己が本然」を再発見したのである。それはまた自らの出発点でもあった若き日の画学生のころの「己が本然」であったかもしれない。それは次のような作品を読めば明瞭に理解できよう。

飛びこめば青き斜面は消え失せてま下にひろがる屋根のなき街

いつしかと我に似かよふ木の椅子の今朝はふてぶてと我を見据ゑぬ

いつしんに耳をすましてあきたらぬ頭蓋の奥をぬすみみんとす

シルレア紀の地層は香きそのかみを海の蠍の我也棲みけむ

いつの世の魚貝の夢かをりをりにまだらに青き殻をあらはす

降りつもる落葉のこゑにうづもれて翅に生れむ夢は見えてゐき

捧げゆくうすきグラスにしたたらすある日の微笑ある夕の嘘

これらの作品にはハンセン病患者の境涯と闘病の悲しみや苦しみを見出すことはむず

かしい。むしろ、当時のモダニズムの詩的発想が海人の想念のなかで短歌という詩型に昇華したものであろう。いっさいの現実という苦境から解放され、思いのままの詩的抽象の世界を飛翔する。それはシュールレアリスムの絵画世界にも通じている。

海人は前川佐美雄と同じ世代であり、年齢も海人のほうがすこし上である。師弟の関係というより同じ志をもった仲間として歌界に新たな風を入れるべく心が通じ合っていたのである。佐美雄が「日本歌人」に入会後はやばやと海人を同行者としての同人にしたのも海人の「己が本然」の才能に気づいたからにちがいない。

そのことは海人の境涯詠、闘病詠の秀歌のわずかな否定するものではけつして無い。

しかし、明石海人が本来求めていたのは、病魔に冒されるという不本意な境涯ではなく、健やかな肉体と精神からの芸術の追求であったはずである。海人が述べた「己の本然」の姿に境涯詠、闘病詠とは異なる感動を覚えるのは海人自身が自由を得たからであろう。

「天刑」から「天啓」に至る海人の精神の道程を想うとき、「翳」の作品群にさらに掘り下げた研究が必要であるように思われる。（まえかわ・さじゅうろう）「日本歌人」編集発行人